修養会を覚えての全校礼拝⑦

（高校三年生による礼拝）

聖書箇所：コヘレトの言葉3:1
”何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。”
――――

今日は11月9日。私たち76回生が捜真で授業を受けられるのは、もう一カ月もありません。そして私たちには、捜真生活における「最後の時」を迎える瞬間が多くなってきています。先日行われた体育祭も、私たち高三にとっては、最後の捜真3大行事でした。

私は、中学二年生から高校二年生まで共練会執行部に所属していました。友人に誘われたことが、立候補を考えるきっかけとなりました。しだいに学校を過ごしやすい場所に変えるために何かしたいという思いが強くなり、立候補を決めました。中一の時、誘ってくれた友人と一緒に、立候補用紙に記名をしに行ったことを今でも鮮明に覚えています。選挙では、全校の前で演説をしなくてはならなかったので、立候補することにはとても勇気が必要でした。しかし、そこで躊躇せずに、新しい一歩を踏み出したからこそ、たくさんの経験ができ、忙しいけれど楽しい捜真生活を送ることができました。

執行部では、中一や高入生に学校紹介の冊子を作成したり、文化祭実行委員会の補助に回ったり、予算総会や決算総会の準備をしたり、学校生活をよりよくするためにはどうすればいいのかを考えて活動していました。いくつか新しいことにも挑戦しました。例えば、決算総会を三部制で行ったことです。新型コロナウイルスが流行し始めてから、チャペルの様子を教室から中継で見てもらうという形で、総会を行っていました。人が密集しないことを条件に、中継ではなく直接総会を聞いてもらうにはどうすれば良いのかを考え、三部制を取り入れることになったのです。そうすることで、それぞれの会場に直接決算の報告を行うことができました。前例のない状態からプログラムを作成したため、なかなか計画通りに物事が進まず、苦労しましたが、その忙しさや大変さというのは、私の学校生活をより彩ってくれていまし

た。私は忙しく過ごすことのほうが好きです。今はもう戻ってこない、執行部での忙しい日々を送っていた私自身をうらやましく思っています。そして何より、あの時に私を誘ってくれた友人に感謝したいですし、また、躊躇することなく、執行部に立候補してよかったと感じています。

何をする時でも、最初は特別に感じます。初めて制服を着た時、まるまる坂を上って初めて捜真に登校した時、入学して初めて友達と話した時、初めて授業を受けた時、初めて部活動に参加した時。もちろん日付までは覚えていませんが、その瞬間を写真として思い出すことは容易です。皆さんも初めての出来事が、記憶のかけらとして頭の片隅に残っていることがあるでしょう。しかし、その初めての経験が常になり、当たり前と化すと、ありがたさを感じなくなっていきます。それどころか、変わらない日常に嫌気がさして、どうでもいいやと、投げやりになることもあるでしょう。物事には良いことも悪いことも、必ず終わりは、やってくるのです。過度に終わりを意識する必要はないけれど、何も考えずに物事をただこなすよりは、「もしかしたら、今やっていることが最後になるかもしれない」と意識しながら過ごすことは、日々を濃厚にする一歩であると思うのです。

では、来年3月の卒業式まで、私に残された捜真生活は、あとどれくらいなのでしょうか。わかりやすくするために、私の六年間の捜真生活を二十四時間で表してみることにしました。深夜0時から始まった時計は、現在午後十時を回り、一日が終わるまで、残りあと二時間を切っています。皆さんに残された時間はどれくらいですか。私に関して言えば、残り二時間。二時間は長いようにも感じます。実際は、携帯電話を見たり寝転がったりしていれば、あっという間に過ぎてしまうことでしょう。失敗しても、上手くいかなくてもいいから、とりあえず、自分から何か行動を起こせば、同じ二時間でも充実した濃い二時間になるはずです。あと二時間、仲間と時間を共有して、卒業後もつながっていられる関係を築き続けることを意識して過ごしていきたいです。

もしかしたらこれが最後かもしれないと、「最後の時」を意識していれ

ば、自然と残された時間を有意義に過ごそうと思うことができるはずです。そして私は、残された短い捜真生活の中で、自分から行動して、高校三年生最後の日まで駆け抜け、76回生全員で、笑顔で、来年3月の卒業式を迎えたいと思います。

（高校三年生による全校礼拝より）